

高知県香美郡土佐山田町

高柳遺跡・高柳土居城跡発掘調査報告書

——明治地区圃場整備工事関連遺跡発掘調査——

1992年3月

土佐山田町教育委員会

高麗土居
蒜



序

土佐山田町には、国指定天然記念物・史跡「竜河洞」、町史跡「山田城跡」をはじめ、数多くの文化財が残されています。また、埋蔵文化財包蔵地の所在数は県下でも有数あります。こうした重要な文化遺産を後世へ継承し、保存することは現代に生活する私達にとって責務の一つでもあり、豊かな郷土を育むうえで大切なことであると考えます。

一方、時代の趨勢に則した地域開発は、さらなる地域の発展と躍進を図るうえで不可欠な要件であり、近隣諸地域を含めた広範囲な開発プロジェクトが進行しつつあります。また、地域の諸条件・環境と融合した計画的な開発は、実りのある豊かな未来へと続く礎になるものもあります。

埋蔵文化財保護と開発事業の問題は、地域開発を行ううえで常に論ぜられる議題であり、環境保護の問題を含めて、社会的关心の高さがうかがわれます。開発か保存かの問題は、優先的価値判断で決定されるものではなく、視点の相違を踏まえた円滑な調整が行われることが必要であると考えます。このため、埋蔵文化財保護へのより一層の迅速な対応と、地域の環境保全と一体となった適切な保存措置を講じることが重要な検討課題となってきております。

本書は、県営圃場整備事業に伴う調査として実施された、高柳土居城跡・高柳遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものであります。調査では、高柳土居城跡から三重の堀が、また、高柳遺跡から建物址等が確認され、高柳土居城跡を核とする村落の所在が明らかにされるなどの貴重な成果を得ることができました。今後、中世の土佐山田町の歴史を探るうえで、基礎的な資料になるものと考えます。本書が、学術資料として、また文化財保護の一助になれば幸いに存じます。

おわりに、今回の調査に終始暖かい御援助をいただきました財団法人高知県文化財団をはじめ、深い御理解・御協力をいただいた高知県南国耕地事務所並びに土佐山田町明治土地改良区及び地域住民の皆様方に衷心より厚くお礼を申し上げます。

平成4年3月

土佐山田町教育委員会

教育長 岡本 章博

例　　言

1. 本書は、明治地区県営ほ場整備事業に伴い、高知県南国耕地事務所の委託を受けて土佐山田町教育委員会が実施した高柳遺跡・高柳土居城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、高知県教育委員会・(財)高知県文化財団の協力を得て土佐山田町教育委員会が調査主体となり、試掘調査を平成元年11月6日～11月11日に、本発掘調査を平成2年9月10日～10月26日の間に実施した。また、整理作業及び報告書作成を平成3年度に実施した。
3. 発掘調査は、試掘調査を吉原達生（高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班主事）が、本発掘調査を山本哲也（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター開設準備室調査係長）・曾我貴行（同室調査員）・坂本憲昭（同室調査員）が担当した。なお、調査事務は吉村泰典（土佐山田町教育委員会社会教育課社会体育係長）が担当した。
4. 本書で使用した挿図のなかで、Fig 1・3は国土地理院発行2万5千分の1（とさやまだN 1-53-28-7-1）を、Fig 2・4・5は高知県作成の明治地区は場整備明治西工区計画平面図（縮尺2,500分の1）を複製して使用したものである。なお、調査区、周辺地形を示す図面の方位は磁北である。
5. 本書の編集は土佐山田町教育委員会が行い、執筆は山本哲也が担当した。
6. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、地元地権者の方々をはじめ明治地区土地改良区、高知県南国耕地事務所、土佐山田町産業振興課の関係各位に種々御協力、御援助をいただいた。厚くお礼申しあげたい。

本文目次

I 調査の経緯と経過	1
II 遺跡の位置と環境	3
III 調査の概要	5
IV 検出遺構と出土遺物	8
遺構	8
遺物	17
V まとめ	20

挿図・図版目次

Fig. 1	遺跡の位置.....	2
Fig. 2	遺跡周辺図.....	2
Fig. 3	遺跡の位置と周辺遺跡.....	4
Fig. 4	調査区位置図.....	6
Fig. 5	高柳土居城跡復元図.....	7
Fig. 6	TR 1	9
Fig. 7	TR 2	10
Fig. 8	TR 3	11
Fig. 9	TR 4	12
Fig. 10	TR 5 ~ 7	13
Fig. 11	TR 9 ~ 10	14
Fig. 12	TR 8 ~ 12 ~ 14	15
Fig. 13	SK 1	16
Fig. 14	出土遺物実測図.....	18
Fig. 15	出土遺物実測図.....	19
PL. 1	TR 1 (南から) · TR 1 (北から)	
PL. 2	TR 1 (西から) · TR 1 中央部 (西から)	
PL. 3	TR 2 調査風景 (東から) · TR 2 内堀検出状態 (東から)	
PL. 4	TR 2 内堀 (北から)	
PL. 5	TR 3 (南から) · TR 3 (北から)	
PL. 6	TR 3 南 (南東から) · TR 3 北 (東から)	
PL. 7	TR 4 (南から) · TR 4 南 (西から)	
PL. 8	TR 5 (北東から) · TR 6 (北から)	
PL. 9	TR 7 (西から) · TR 8 (西から)	
PL. 10	TR 9 ~ 10 (西から) · P 1 (南から) · P 16 (西から)	
PL. 11	SK 1 (東から) · SK 1 (北から)	
PL. 12	TR11 (東から) · TR12 (北から)	
PL. 13	TR13 (西から) · TR14 (北から)	
PL. 14	出土遺物 (青磁・天目茶碗・土師質土器)	
PL. 15	出土遺物 (土師質土器)	
PL. 16	出土遺物 (土師質土器・瓦質土器・須恵器・土師器・土鍤・鉄製品)	

I 調査の経緯と経過

高柳遺跡は、昭和63年度・平成元年度に実施された県内遺跡詳細分布調査（香美・長岡ブロック）によって発見された弥生時代～中世の遺物散布地である。^①また、高柳土居城跡は物部川右岸、舟入川沿いの微高地上に築かれた中世城館である。^②

県営明治地区ほ場整備事業は、物部川東岸、西岸の耕作地・延べ 153.5 ha を対象としたほ場整備事業で、昭和57年度～平成2年度間に工事が実施された。この間に、林田工区では土佐山田町林田に所在する林田遺跡が、また明治工区では土佐山田町山田に所在の稻荷前遺跡が工事実施区域に含まれたことから、発掘調査が実施されている。今回の調査は、高柳遺跡、高柳土居城跡が平成2年度に施行の明治西工区（対象面積16.9ha）に所在することから、高知県教育委員会、土佐山田町教育委員会と高知県南国耕地事務所、土佐山田町産業振興課、明治地区土地改良区により協議が実施され、平成元年度に試掘調査が、平成2年度に試掘調査の結果に基づいて本発掘調査が行われたものである。

試掘調査は、工事計画地における高柳遺跡、高柳土居城跡の遺物散布範囲約 2ha を対象に、^③平成元年11月6日～11月11日の間に実施された。明治西工区の工事計画では、面工事は平均20～30cmの堀削による区画整理であり、耕作土下への堀削深度は浅い。このため、試掘個所は主に水路、道路等工事計画地を中心に選定し、2×2m レンチを12ヶ所（G1～12）、任意に設定した。その結果、高柳土居城跡東側の畦脇に設定したG9トレンチから地表下0.75mで東南方向の石列及び西側へ傾斜する落ち込みが、また同城跡北東に設定したG10トレンチで地表下0.55mの黄褐色粘質土中から完形の土師質土器塊が出土し、遺構及び遺物包含層等が検出された。以上の試掘調査結果を基に、再度協議を行った結果、高柳遺跡及び高柳土居城跡における水路、道路等工事区域について発掘調査をその他の部分については立会調査を行うことになった。

本発掘調査は、平成2年9月10日から10月26日の間に実施した。調査は、高柳土居城跡周辺部の水路、道路工事区域を対象として3ヶ所のトレンチTR1～8を任意に設定し、同城跡の堀跡、土塁等の遺構の確認を行った。また、試掘調査時のG10トレンチ周辺に3ヶ所のトレンチ（TR9～11、このうちTR9・10は拡幅のうえ1トレンチとした）を設定し、遺構等の検出作業を行った。総発掘面積は120m²である。なお、工事の進行に併せて工事期間中に隨時立会調査を行った。

註

1. 高知県教育委員会編「高知県遺跡地図一香美・長岡ブロッケー」高知県教育委員会 1990
2. 高知県教育委員会編「高知県中世城跡分布調査報告書」高知県教育委員会 1984
3. 土佐山田町教育委員会編「林田遺跡」土佐山田町教育委員会 1985
4. 森田尚宏、古原達生「稻荷前遺跡発掘調査報告書」土佐山田町教育委員会 1990
5. 「土佐山田町明治地区県営圃場整備事業に伴う「高柳遺跡」試掘調査結果報告」土佐山田町教育委員会 1989

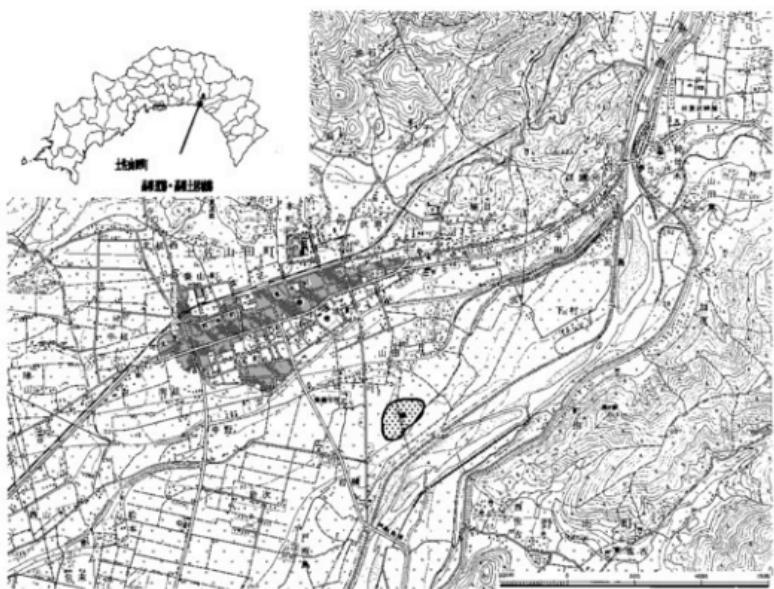


Fig 1 遺跡の位置

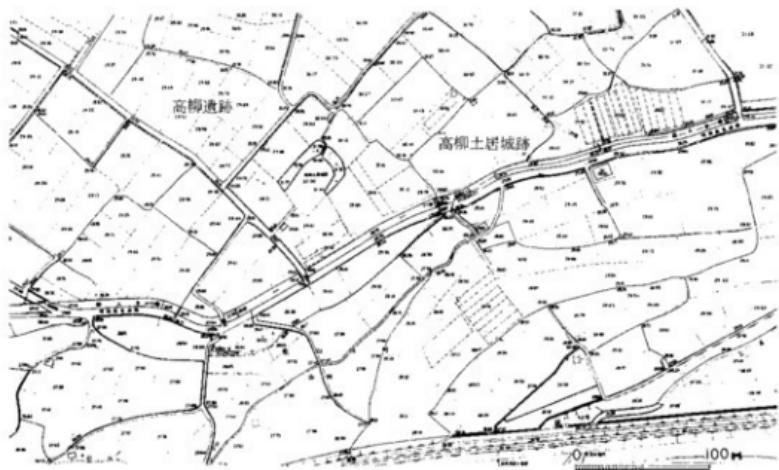


Fig 2 遺跡周辺図

II 遺跡の位置と環境

高柳遺跡は、土佐山町山田字寺ノ下 980-1 他に、また高柳土居城跡は土佐山田町山田字二ノヘイに所在する。遺跡の所在する土佐山田町は、県中央部で高知平野北東部に位置する総面積 116.7km²、人口約 2 万 2 千 7 百人余の町で、高知市から東へ約 18km、東は香北町、西に南国市、南に野市町、北は大豊町と接している。⁽¹⁾ 弥生人の居住跡と奇勝に富む石灰鐘乳洞穴で名高い竜河洞（昭和 9 年 12 月 28 日、国指定天然記念物・史跡）は、町の東端の三宝山中腹、土佐山田町逆川にある。

町の東側を南流して土佐湾へ注ぐ一級河川物部川は、物部川右岸域で古物部川による古期扇状地（通称長岡台地）及び新期扇状地を形成している。土佐山田町小田島から同町岩積にかけての標高 30~40m 前後の扇状地上には、弥生~中世の遺物散布地が存在し遺跡数も多い。高柳遺跡、高柳土居城跡は、物部川の右岸、舟入川沿いの標高 30m 前後を測る新期扇状地上に立地している。両遺跡周辺の主要な遺跡としては、原遺跡、原南遺跡、稻荷前遺跡、補目遺跡などがあげられる。これまでの発掘調査等から、高柳遺跡の西側に接する原遺跡からは弥生中期後半~末の竪穴住居址 1 棟、環濠跡、古墳時代後期の土坑群、溝 2 条、ピット等、奈良末~室町のピット等が、また原南遺跡では弥生中期後半（IV 様式後半）の竪穴住居址 1 棟、高床倉庫 1 棟、溝 1 条、弥生後期の溝 1 条、古墳時代後期~中世の土坑、ピット等が検出されている。⁽²⁾

稻荷前遺跡は、高柳遺跡の北東約 700 m に位置しており、弥生中期後半~末の竪穴住居址 1 棟、奈良~平安時代の堀立柱建物址 2 棟、溝 2 条、鎌倉~室町時代の堀立柱建物跡 1 棟、柵列 1 の他、石室状遺構が検出されている。⁽³⁾ さらに、稻荷前遺跡の北側に位置する補目遺跡からは、奈良末~平安時代前半の堀立柱建物址 1 棟、塙 1、戦国時代の堀立柱建物址 1 棟が検出されている。⁽⁴⁾

以上の如く、調査地の周辺には弥生中期後半~末の集落跡が形成され、また出土遺物等から弥生後期前半~古墳時代初頭・古墳時代後期（6 C 後半~7 C）の集落が存在することが推測されるのに加えて、奈良末~平安時代の堀立柱建物址・鎌倉~戦国時代の溝跡、堀立柱建物址等が検出されていることからも、古代から中世にかけて継続的に居住地等として活用されていたことがうかがわれる。なお、古代に関しては奈良末~平安時代の堀立柱建物址等が稻荷前、補目遺跡から検出されると共に、原及び原南遺跡から溝、ピット等が検出され、高柳遺跡を含めて当該期の土器類が出土すること、「大リョウ」の地名をもち郡衙関連遺跡とみられる大領遺跡（古墳~中世遺物散布地）が高柳遺跡の南北約 1.2 km に所在することなどは、大領遺跡を中心として物部川右岸域、舟入川流域に広範囲な律令期の関連遺跡が存在し、舟入川、物部川を利用した物資運搬、交通関係の要所として、役所及び倉庫群などが形成されていた可能性がもたれる。

高柳遺跡と隣接する高柳土居城跡は、中世の城館跡である。南辺と東南辺を欠くものの匱字

型の土壘跡を残し、詰部が遺存する。今回の調査により、堀跡等が確認され城館の変遷の一端が明らかとなった。また、高柳遺跡からは15C後半~16C中頃の柱穴等が検出され、屋敷跡の所在が確認されて高柳土居城跡をとりまく初期城下町的な居住地の存在が判明した。

高柳遺跡、高柳土居城跡は、周辺遺跡の成立、消長過程と密接な関連をもっている。今後の詳細な資料検討により、弥生時代~古墳時代にかけての推移、『和名類聚抄』による「山田郷」から戦国期の山田市周辺地への変遷など、具体像が明瞭となることが期待される。

註

1. (参考)『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会 1979・高知県統計協会編『1992 高知県民手帳』
2. 広田典夫・山本哲也・森田尚宏・角谷和男『公共施設設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—原遺跡一』高知県教育委員会 1982
広田典夫『公共施設設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—原遺跡一』Ⅱ『高知県文化財調査報告書』第25集 高知県教育委員会 1984
3. 出原恵二『原南遺跡発掘調査報告書』高知県文化財団 1991
4. 森田尚宏・吉原達生『稲荷前遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1990
5. 山本哲也『楠目遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1988
6. 土佐山田町岩次エラミ261-1他所在。現況、水田・畑。奈良~平安時代の須恵器、土師器片散布。散布量は多い。遺跡番号(市町村No.) 190158



- | | | | |
|----------|---------|---------------|----------------|
| 1 高柳土居城跡 | 5 稲荷前遺跡 | 9 ひびのきサウジ遺跡 | 13 金地遺跡 |
| 2 高柳遺跡 | 6 楠目遺跡 | 10 ひびのき遺跡 | 14 須江上段遺跡 |
| 3 原南遺跡 | 7 大塚遺跡 | 11 楠目城跡(山田城跡) | 15 大領遺跡 |
| 4 原遺跡 | 8 大塚古墳 | 12 林田遺跡 | (1~14. 調査実施遺跡) |

Fig 3 遺跡の位置と周辺遺跡

III 調査の概要

試堀調査

高柳遺跡、高柳土居城跡の遺物散布範囲約2haを対象に、 $2 \times 2 + 1 \times 2\text{m}$ のトレンチを任意に設定し（G 1～12）、遺物包含層及び遺構等の確認を行った。発掘面積は、約38m²である。その結果、高柳土居城跡のほぼ北側を走る畦へ直角に設定した $1 \times 2\text{m}$ のトレンチ（G 9）から石列を検出し、また同城跡北東に設定した $1 \times 2\text{m}$ のトレンチ（G 10）から完形の土師質土器塊が出土するなどの成果があった。この調査により、現在の畦、水路等が当時の土塁、堀等を踏襲している可能性が濃厚であることが判明したことから、当該圃場整備事業により影響を受ける部分について、本発堀調査を実施することが必要となった。⁽¹⁾

本発堀調査

試掘調査の成果を基に、水路及び道路工事区域を対象としてトレンチ方式により本発堀調査を行った。総発掘面積は120m²である。

発掘区は、高柳土居城跡の周辺に11ヶ所（TR 1～8・12～14）、高柳遺跡周辺に3ヶ所設定し、遺構等の確認作業を行った。各発掘区の調査内容は以下のとおりである。

各トレンチの調査概要

TR 1～4

高柳土居城跡西側の農道工事区域に設定したトレンチで、TR 1の南端から外堀の一部が、TR 2から内堀の西半分及び内堀の隅角部（コーナー）が、TR 3・4から内堀の東半分が検出された。

TR 2～4の調査結果から、現存土塁のうち城跡西側の土塁に沿って内濠（内堀）が巡り、土塁の南端切れ目から東方向へL字型に曲がっていることが確認された。また、TR 1では、外堀と同一方向の石列が検出され、外堀に伴う土塁、堀等が存在していたことが明らかになった。

TR 5～8

城跡北東側及び東側に設定したトレンチで、TR 5・6・8から配石遺構、溝等が検出された。TR 6の南端で検出された石列は、TR 1で検出された石列と類似しており、土塁等の基礎部と考えられる。

TR 9・10

試掘区であるG10周辺に設定したトレンチで、拡張のうえ連結した。暗褐色粘砂土をベースとした柱穴及びピットが検出された。柱穴及びピットは灰褐色粘質土を埋土とし、直径16～35cm、深さ8～20cm前後を測る。柱穴及びピット内から土師質土器片等が出土した。

TR 11

TR 9・10の西側に設定したトレンチである。4層に区分され、遺構等の形成は確認されなかった。

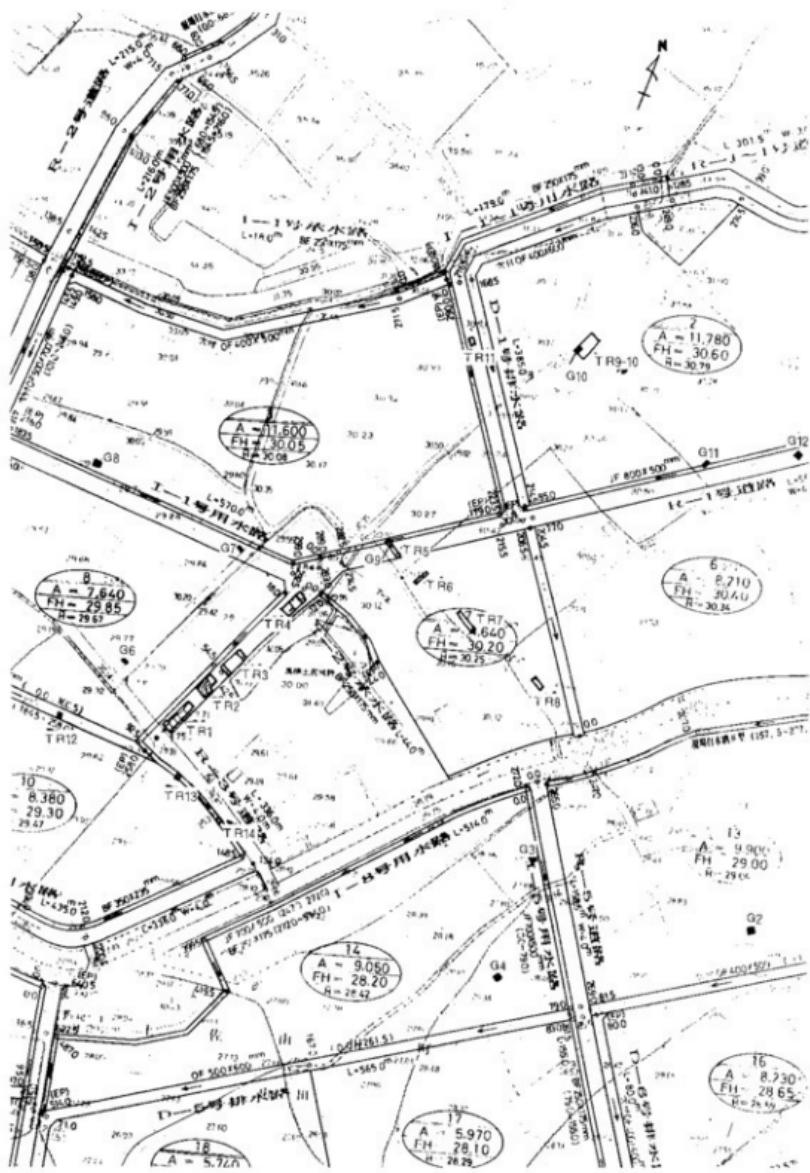


Fig. 4 調査区位置図

TR12~14

高柳土居城跡南側に設定したトレーナーで、TR14からピット2個が検出された他は遺構等は検出されなかった。また、TR1南側に位置するTR13・14からは、外堀に関連した遺構は確認されなかった。このため、外堀の規模は東西方向の現況農道の道路幅のなかで収まるものと考えられる。

註

- 1.『土佐山田町明治地区県営開拓整備事業に伴う「高柳遺跡」試掘調査結果報告』土佐山田町教育委員会 1989



Fig 5 高柳土居城跡復元図

IV 検出遺構と出土遺物

今回の調査で、TR 1～4から高柳土居城跡の堀(濠)、石列、溝が、TR 5・6・8から石列、溝が検出された。また、TR 9・10・14から柱穴及びピットを検出した。検出遺構の概要と出土遺物の内容については、以下のとおりである。

遺構

高柳土居城跡

TR 1から外堀が、TR 2から内堀及び内堀隅角部が、TR 3・4から内堀が検出された。また、TR 1・6で城館関連遺構と考えられる石列・溝が検出された。なお、TR 5・7・8では耕作土下で、近世に形成されたとみられる石列・溝が検出されている。

堀(濠)

外堀の内肩がTR 1の南端で検出された。堀肩には人頭大の河原石を東西方向に配し、堀壁は拳大～人頭大の河原石で石積みを施している。堀内堆積土は、淡灰色粘砂土及び灰褐色粘砂土である。堀肩上端部から堀底までは約70cm前後を測る。TR 13・14では堀外肩等が検出されていないことから、堀外肩は現農道下に存在しているとみられる。堀幅は約7m以下に復元される。

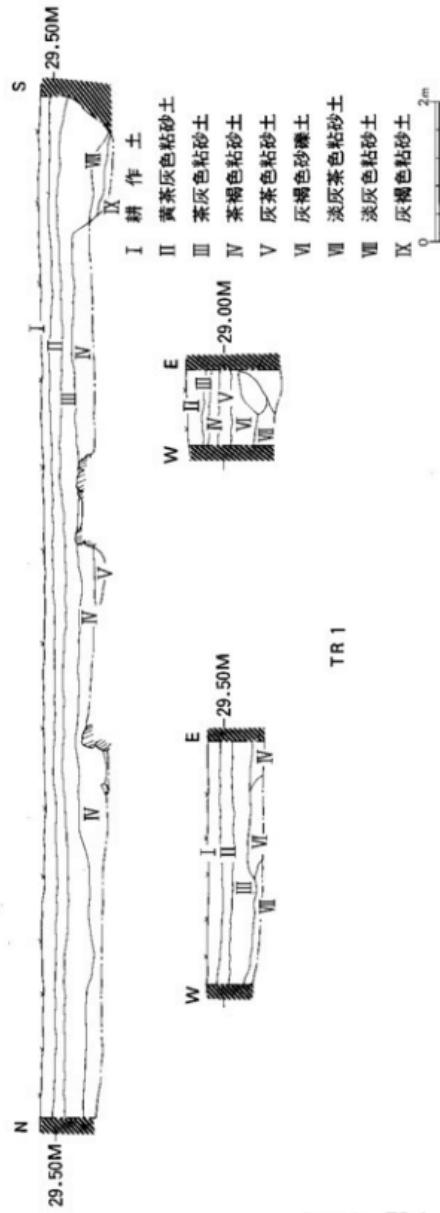
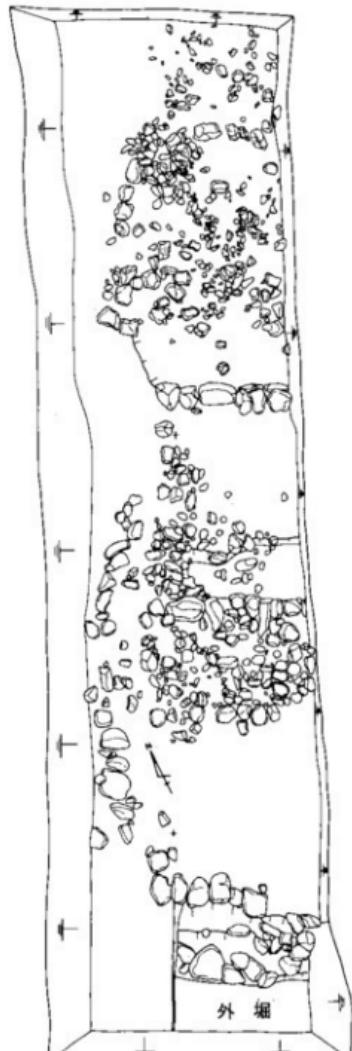
内堀の外肩及び隅角部(コーナー)がTR 2で、また、内堀の内肩がTR 3・4で検出された。内堀の隅角部は、拳大～人頭大の河原石を野ざら積みして構築しており、堀肩上端部から堀底までは約60～70cmを測る。堀底から青磁碗片が、堀肩上部の堆積土中から天目茶碗片、細片の土師質土器片が出土している。なお、堀基底部は検出範囲において二重になっており、一時期の構築方としては不自然な状況を呈している。検出状況からすれば、外側の堀壁にくずれが生じたため、堀幅を狭めて内側に堀肩を再補修したものと推察される。

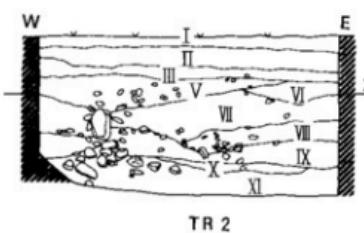
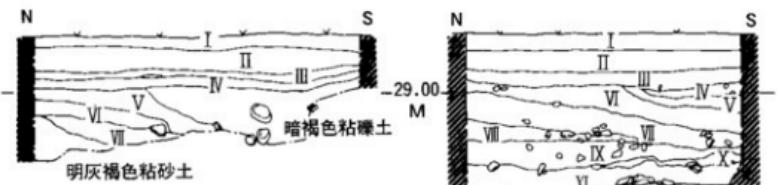
TR 3・4で検出の内堀の内肩は、現存土壘の西側に接して堀削されている。地山を素堀りしており、堀肩及び堀壁には列石及び石積みは施されていない。堀肩から堀底までの深さは、平均して約1.60m前後である。TR 3・4の堀内堆積土中からは、細片の土師質土器片等が出土している。

TR 2～4の内堀の検出状況から、内堀の東西幅は約5m前後に復元される。また、内堀の外肩から外堀の内肩までは、約16mを測る。

石列・溝

TR 1で外堀と同方向の石列が三列検出された。南側の右列は、拳大の河原石を配石したもので、外堀堀肩からは2.6m北側に位置する。また中央部の石列は、石面を内郭側に揃えて配石しているもので、外堀堀肩からは4.3m北側に位置している。中央部の石列と南側の石列との間隔は1.7m前後を測り、石列間にには集石が施されている。北側の石列は、中央部の石列の北側2.7mに位置し、南側へ面合わせが行われている。また、石列の北側には集石が施されて





- I 耕作土
- II 褐色粘質土(小礫含む)
- III 棕色粘土(径 5 mm程度の礫含む)
- IV 淡黄褐色粘土
- V 暗褐色粘土
- VI 暗黄褐色粘土
(部分的に拳大以下の塊混じる)
- VII 暗褐色粘土(黄褐色土をブロック状に含む)
- VIII 暗灰褐色粘土(下部に Fe沈着)
- IX 暗褐色粘土
(砂質有。Fe分ブロック状は全体に見られる。
下部は Fe分の沈着有)
- X 灰色粘土(径 5 mm以下程度の礫若干含む)
- XI 暗灰色粘土(人頭大以下の礫を部分的に含む)

Fig 7 TR 2

DL = 29.00M



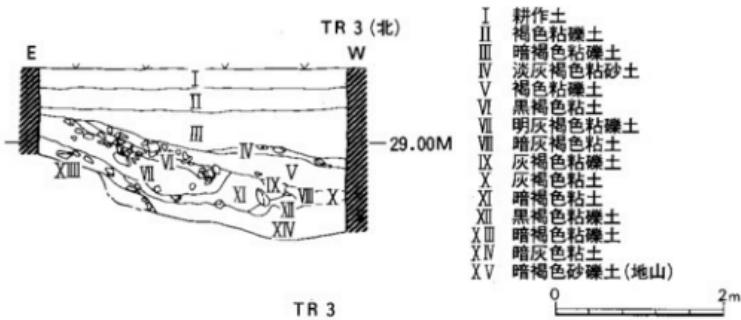
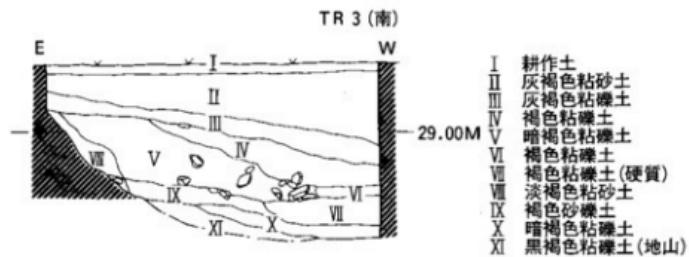
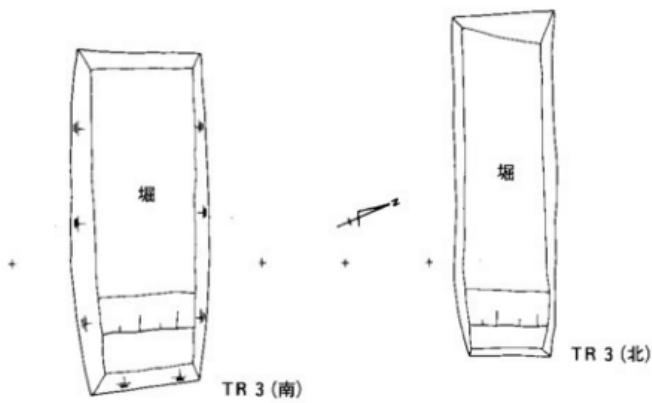
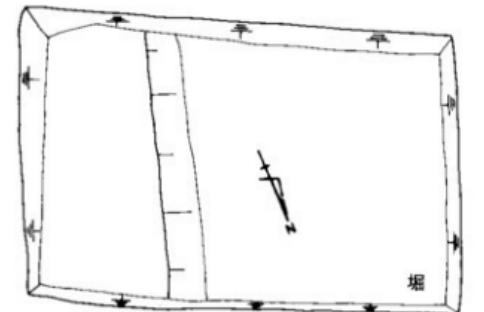
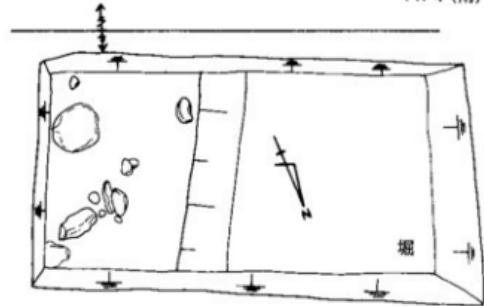


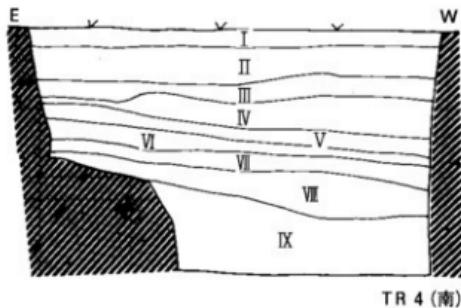
Fig 8 TR 3



TR 4 (南)



TR 4 (北)



- I 耕作土
- II 黄灰色粘砂土
- III 茶褐色粘壤土
- IV 茶灰色粘砂土
- V 黄灰褐色粘土
- VI 茶灰色粘砂土
- VII 灰褐色粘砂土
- VIII 灰茶色粘壤土
- IX 暗青灰色粘土

— 29.00M —
0 2m

Fig 9 TR 4

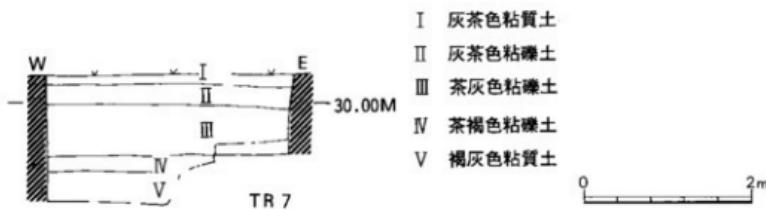
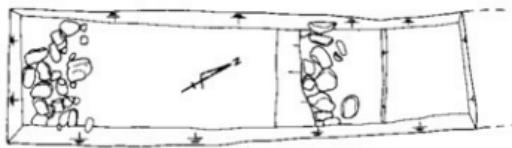
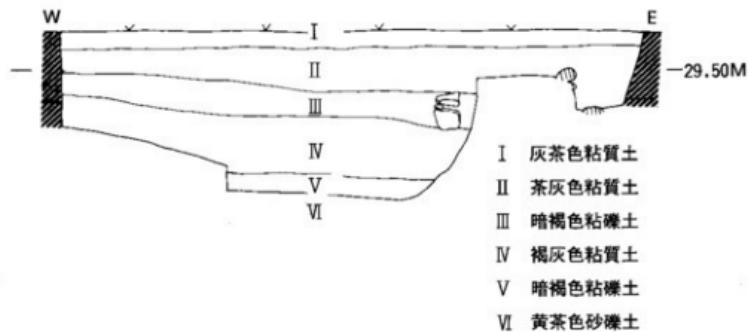


Fig 10 TR 5~7

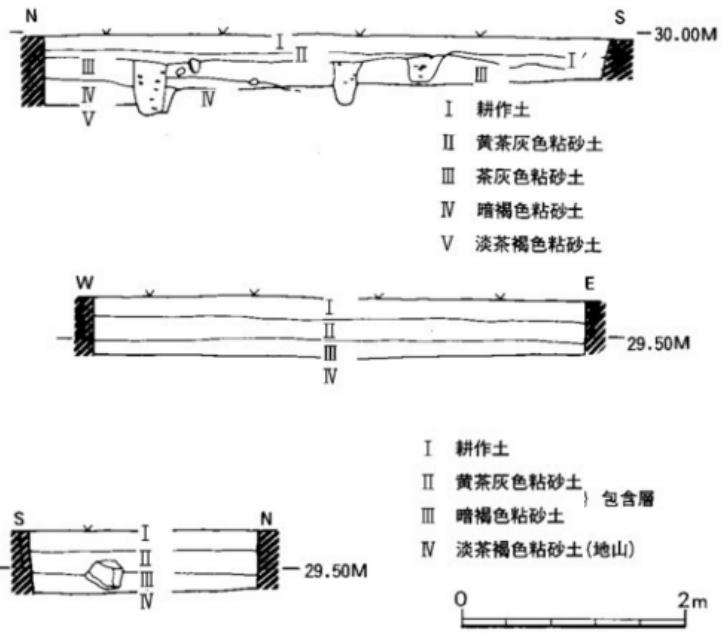
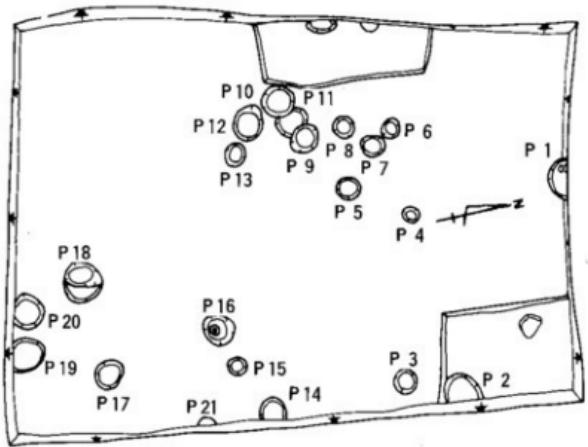
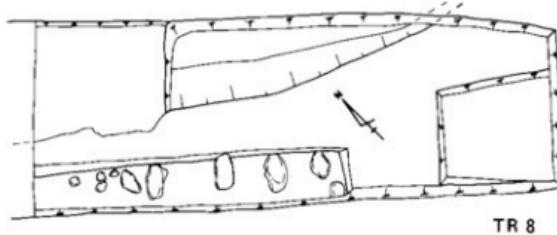
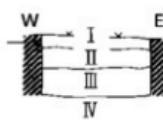


Fig 11 TR 9 · 10



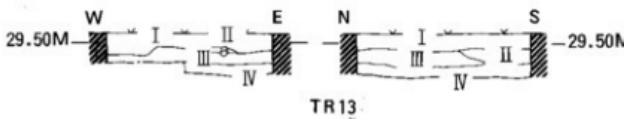
TR 8

- I 耕作土
- II 黄茶灰色粘砂土
- III 暗褐色粘砂土
- IV 茶褐色粘砂土



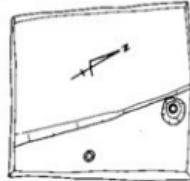
TR 12

- I 耕作土(灰色粘质土)
- II 茶灰色粘砂土
- III 暗褐色粘砂土
- IV 茶褐色粘砂土

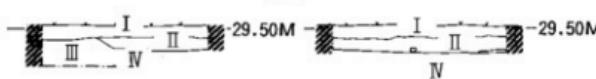


TR 13

- I 耕作土(灰色粘质土)
- II 茶灰色粘砂土
- III 暗褐色粘砂土
- IV 茶褐色粘砂土



TR 14



TR 8 · 12 · 13 · 14

- I 耕作土
- II 褐色粘质土
- III 明灰色砂质土
- IV 黄褐色粘土

0 2m

Fig 12 TR 8 · 12~14

いる。中央部石列の西側では、不揃いではあるものの溝肩とみられる南北方向の石列がみられる。これらの石列・集石は、外堀内側における土壘・塙等の施設の地業痕とみられる。特に、南側及び中央部の石列間に、土壘又は塙等が存在していた可能性が濃い。TR 6 では発掘区北側で石列が、南端で集石が検出されている。石列と集石の間隔は約 2.5m を測る。南端の集石は、土壘等の基礎部であることが推測される。

高柳遺跡

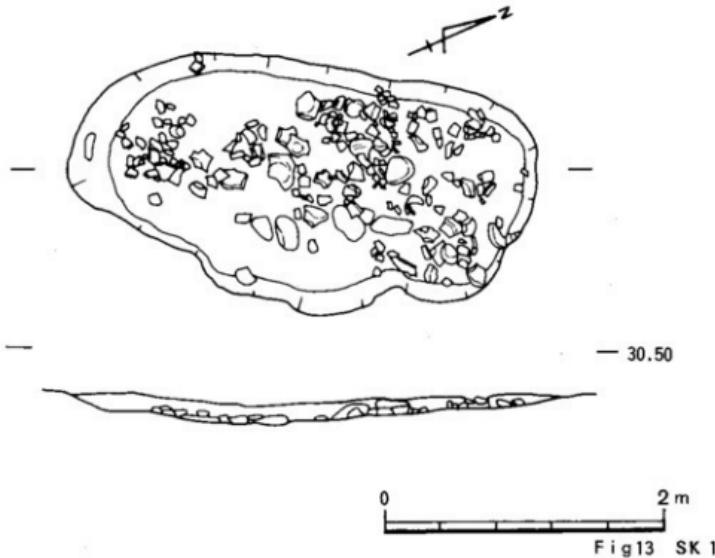
柱穴・ピット

TR 9・10・14で柱穴・ピットが検出された。TR 9・10では、表土下約 22~26cm で茶灰色粘砂土上面に柱穴及びピットを検出した。遺構の埋土は、炭化物混じりの灰褐色粘質土である。柱穴及びピットの直径は 16~35cm・深さは 8~20cm 前後を測る。遺構間には、重複関係をもつものがあり、2~3 時期に区分される。P 1~4・9・10・12・15・16・19・20 から土師質土器片が出土した。遺構及び包含層中からの土器片出土量は、調査区全体のなかで最も多かった。

TR 14 ではピットが検出された。黄褐色粘土（地山）上面で確認されたもので、埋土は明灰色粘質土である。ピットの直径は 12~30cm 大で、深さは 11~18cm 前後である。

SK1

TR 11 南側で、表土工事中に確認された土器窪である。長径 2.05m 短径 1.06m・深さ 12cm 前後を測る。土師質土器皿・壇・瓦質土器等が出土した。



遺物

青磁碗・皿 (TR 1・2・4・9~11)、土師質土器 (TR 1~11)、染付碗 (TR 2)、天目茶碗 (TR 2)、瓦質土器 (TR 9・SK 1)、土鍤 (TR 2)、須恵器 (TR 1・5・9・10)、弥生土器 (TR 11)、砥石 (TR 1)、漆器椀片 (TR 2)、加工木 (TR 2~4) 等が出土したが、TR 2・8~11から出土の土器類を除いて他は細片が多く、図示できるものは少なかった。なお、SK 1からは土師質土器壺・小壺・鍋・羽釜等の良好な資料が出土した。

青磁 (1~4) … 1は内面に飛雲文を有する龍泉窯系青磁。2・2'は体部外面に鎬蓮弁をもつ碗。3は碗底部で1~3はTR 9・10出土。4は内面見こみに印花文を施した碗で、TR 2検出の壠底から出土。この他に、TR 1・4・11から碗・皿類の細片が出土している。

天目茶碗 (5) … 5は、瀬戸美濃系の天目茶碗でTR 2検出の壠肩部から出土。外面の施釉はぶい褐色を呈する。

土師質土器 (6~45) … 皿 (6~30)・小壺 (31)・塊 (32~45) が出土している。皿は、9がヘラ切り底である。以下は既て回転糸切り底である。色調は灰白色又は黄橙色から橙色を呈するものが多い。底部から口縁部にかけての形態により、細分可能である。6~11はTR 9・10から出土。このうち7・8はP16から、9はP1から、10はP10から出土している。12~30はSK 1で出土。小壺 (31) は、TR 9・10からの出土で、底部からやや内湾ぎみに立ち上がる体部をもち、底部は回転糸切りである。6~11と12~30の皿では、法量・形態に差違が認められ、時期差が明白である。また、6~11のなかで9は底部から短く外反する体部をもち、他の皿類との形態差をもつ。9はP1からの出土で、P16からの7・8との形態差は、ピット形成時期の差を示すものであろう。塊 (32~45) は、33 (G10)・36 (TR 9・10) を除いてSK 1からの出土である。ロクロ使用の形成で、底部は既て回転糸切りである。(42・43を除く) 底部から斜め上方に立ち上がり、口縁部近くで外方へ屈曲する。口縁端部は肥厚する。色調は灰白色・黄橙色を呈する。42・43は輪高台を有し、45は円盤状高台をもつ。その他の塊類は、平坦な底部をもつ。

瓦質土器 (48・49・51) … 羽釜 (48)・鍋 (49)・鍋足 (51) が出土している。48・49は、体部以下を欠き、口縁部の破片である。48・51は、TR 9・10から、49はSK 1からの出土である。その他の遺物 (46・47・52・53) … TR 9から土師器盤脚部 (46)、SK 1から須恵器高台付碗 (47)、土師器甕 (50) が出土している。これらの遺物は、奈良末~平安時代に属するもので、周辺区域での遺構形成をうかがわせるものである。また、TR 1の遺構検出面上部から土鍤 (52) が、TR 9・10で鉄釘片 (53) が出土した。

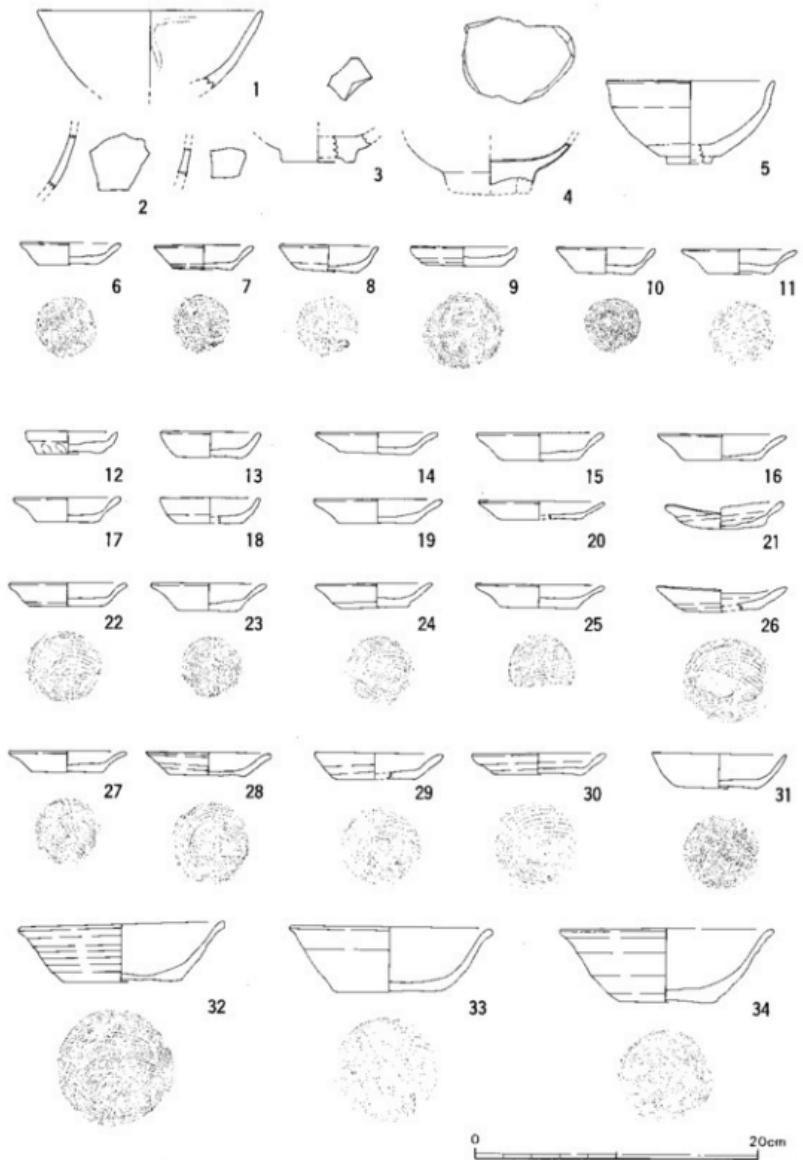


Fig. 14 出土遺物実測図

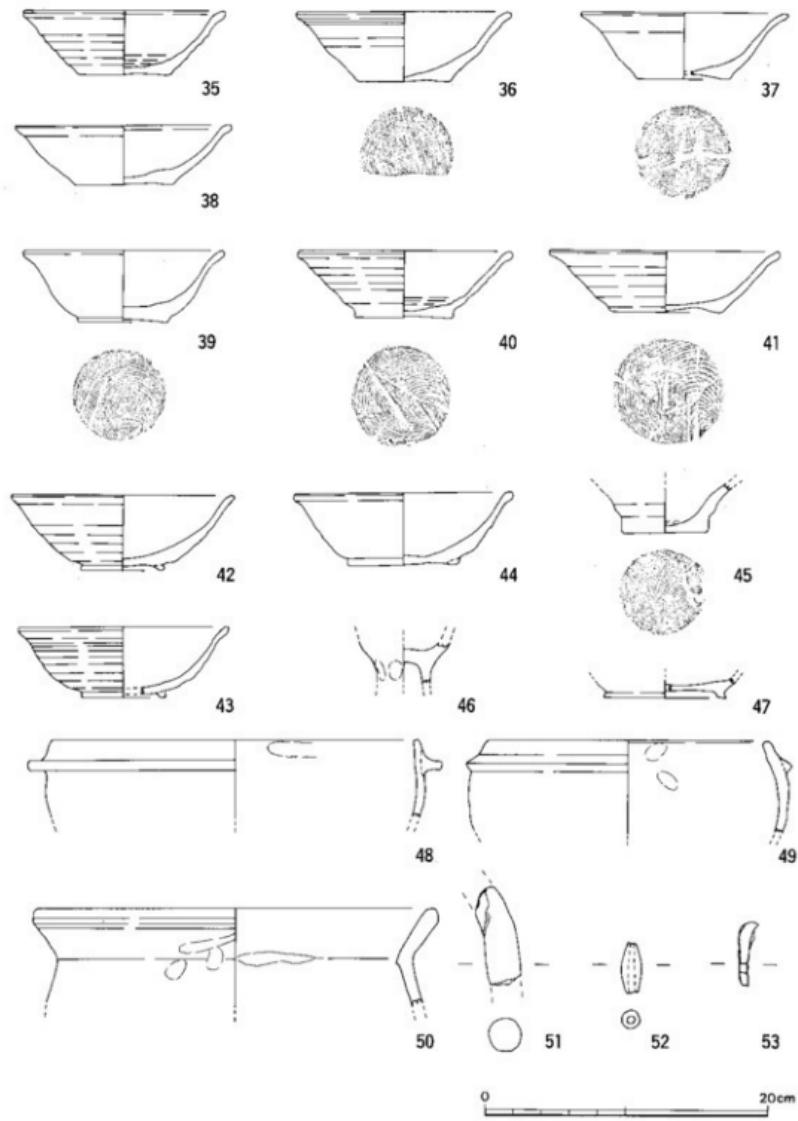


Fig 15 出土遺物実測図

V まとめ

今回の調査は、明治地区県営ほ場整備事業・明治西工区(対象面積16.9ha)に伴う高柳遺跡・高柳土居城跡の緊急発掘調査として実施されたものである。昭和57年度から施行された当該ほ場整備事業も、平成2年度の明治西工区ほ場整備工事をもって延べ153.5haにおよぶ水田・畠地の再編区画整理工事が終了した。この間に、林田工区においては林田遺跡が、明治工区では稻荷前遺跡が、明治西工区で高柳遺跡・高柳土居城跡の調査が同事業の施行に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施され、物部川左岸の林田遺跡では弥生時代後期後半～末の集落跡が、また物部川右岸の稻荷前遺跡では弥生時代中期後半～末の集落跡・奈良～平安時代の掘立柱建物跡が、高柳遺跡・高柳土居城跡で中世の屋敷跡及び居館に伴う堀跡等が検出され、当地域の弥生・奈良～戦国時代の集落等についての新たな知見が得られた。今回の調査では、工事による掘削深度が浅く(表土・耕作土の入れ替え後、盛土工)、立会調査との併用であったことなどから調査面積も少なく、遺跡の全容を明らかにすることはできなかったが、高柳土居城跡を中心とする中世集落の構成内容などについて貴重な手掛りを得ることができた。調査で得られた所見と今後の課題についてふれ、まとめとしたい。

高柳土居城跡

高柳土居城跡は、物部川右岸・舟入川西沿いの平地に築かれた中世城館である。⁽¹⁾詰・土壘・濠(堀)跡が残り、現況は水田・墓地である。城館に関連する地名としては所在地の土地の字名に「ニノヘイ」が、また城館跡周辺には「アミダゼ西」「加治屋敷」などの字名が冠されている。「長宗我部地検帳」によれば「高柳西ニノ堀 一、卅七代四歩勾 中屋敷 同し西内佐渡守給」「同じ詰 一、式十三代二歩勾 上屋敷 同し給 土る識」と記されており、西内佐渡守の給地となっている。⁽²⁾また、「南路志」では、阿弥陀寺(瑠璃山慈眼院阿弥陀寺 真言宗五台山末寺)の寺記として、「寺記伝往昔細河左近殿山田村高柳に土居在之節菩提寺にて…」と云⁽³⁾えている。

高柳土居城跡の復元として松本豊寿氏は、字「ニノヘイ」のうち土壘周囲の方形地形を郭とし、城詰・ニノ堀・詰後の諸郭と一重の環濠からなる単濠複郭式屋敷城として分類され、豪族屋敷城と位置付けられた。⁽⁴⁾また、前田和男氏による再検討により、土壘に沿った濠跡の存在が切図等から復元され、二重の濠が形成されていたことが指摘されている。⁽⁵⁾

城館主としては、「長宗我部地検帳」による西内佐渡守のほか、細川氏(西内氏)・細川源右衛門尉則英・西内常陸、等が在していたことが伝えられている。西内氏は、山田城城主の山田治部少輔大中臣基道の重臣で遠祖は清和源氏細川氏、西内常陸の代に山田氏の家老となり主城は鳥ヶ森城とされる。また、天文十八年(1549年)に長宗我部国親が山田氏を滅ぼした後は長宗我部氏に帰順し、西内常陸の子である西内佐渡守に高柳土居は給付されている。⁽⁶⁾

今回の調査により、高柳土居城跡周辺に設定したTR1～4から堀跡(濠跡)が検出され、

外堀・内堀からなる二重の堀を巡らした城館跡であることが確認された。内堀は、切図等から、これまで指摘されていた如く土壁に沿って形成され、TR 2 から堀隅角に該当するコーナー部が検出されたことから、諸を囲む内郭の濠として機能していたことが明らかとなった。

内堀の隅角部（TR 2 検出）は、地山（黒褐色粘土、暗褐色砂礫土）を掘削後、堀西側の肩部を拳大又は人頭大の河原石を野づら積みして構築している。これに比較して直線部は地山掘削だけで形成されており（TR 3～5 検出）、堀石垣等の構築は認められない。なお、隅角部は基底部に重複関係が認められ再補修されていたことが明らかで、堀内堆積土中から出土の陶磁器類等の遺物からみれば、15世紀後半に構築され、16世紀前半に新たに積み直しが行われたものとみられる。なお、内堀の堆積土中からは16世紀中頃以降の陶磁器類は出土していないことから、戦国時代末までには内堀としての機能が終焉していたと考えられる。

外堀は、TR 1 の南端で検出された。堀端には人頭大の河原石を配し、斜面部は二～四段の河原石により野づら積みが行われている。外堀から内堀に至るまでの空間には、堀と同一方向の石列・石積みがみられ、地業が施されていた。この石列・石積み等については、城館内に所在したとみられる土壘・塀等の基礎地業痕と推察される。外堀の全容は今回の調査では明らかにすることはできなかったが、検出位置からみて島田豊寿氏の復元例に示されたように、城館南側の現況農免道路及び西側の農道をラインとする範囲に外堀の南堀・西堀が形成されていると推測される。

TR 5・6・8 から、配石造構・溝が検出された。TR 5～8 では、城館の北堀が検出されることが期待されたが、堀の存在を示す造構等は検出されなかった。TR 6 で検出された溝状の配石造構は、TR 1 検出の配石・石積みに類似しており、土壘等に伴う造構である可能性が強い。

高柳遺跡

TR 9・10 から柱穴・ビット等が検出され、15世紀後半～16世紀前半の土器類等が出土した。部分的な調査であり、屋敷跡等の造構構成については明らかにし得なかったが、高柳土居城跡を核として形成された中世農村、いわゆる初期戦国城下町としての居住地が存在していた可能性が強い。なお、SK 1 から12世紀～13世紀の土器類が出土しており、周辺に当該期の造構形成がうかがわれる。

高柳土居城跡は戦国時代に形成された城館跡であるとみなされてきたが、具体像は不明であった。今回の調査により、二重の濠をもつ城館であり、15世紀後半には形成されていたことが判明した。さらに、16世紀中頃～後半にかけて内堀の機能が失われていくなど、変容の過程が明確となった。高柳土居城跡の性格としては、在地豪族の居館であり、有力士豪の屋敷城として捉えることができる。松本豊寿氏の分類による重濠複郭式屋敷城に位置付けられ、屋敷城を中心として豪族屋敷村が形成されていたと考えられる。

高柳土居城跡の規模は、物部川流域の他の中世城館と比較して（岩村土居城跡・包末土居城跡・田村城館跡など）、突出するものではなく、いわば中規模の城館である。しかし、位置的に

は背後に肥沃な扇状地を有する物部川右岸域に所在し、高知平野北東部の要所に立地するなど、主要な生産地と水上及び陸上交通等の要を掌握した中世城館であるとみなされる。高柳土居城跡の成立の背景には、土佐守護代細川氏や戦国大名山田氏の地域支配と深く関与した在地豪族（西内氏など）の存在が指摘される。

天正三年（1575）の長宗我部元親による領国統一以降、高柳土居城跡を核とした豪族屋敷村も解体を向えることになる。天正十六年（1588）の「山田郷地検帖」（『長宗我部地検帳』）では、西内氏が城跡を新土居として給付されているものの、旧領地は他の給人の給地並びに屋敷へと転化している。高柳土居城跡の内堀が機能を失うのもこの時期に符号することから、天文二十一年（1551）頃の山田氏の滅亡と長宗我部氏による支配の確立を背景として、屋敷城としての機能も質的変化をとげたことがうかがわれる。

このように、高柳土居城跡は在地豪族の屋敷城として成立し、豪族屋敷村の中核として在地支配の拠点であったところが、中世末期には長宗我部氏による地方統一の過程をうけて、城館（屋敷城）から土居屋敷へと移行していったことが明らかである。

高柳土居城跡を核とした屋敷村の内容、物部川流域における他の中世城館や山田市との関連などについても、今後の重要な検討課題である。⁽⁹⁾ ⁽¹⁰⁾

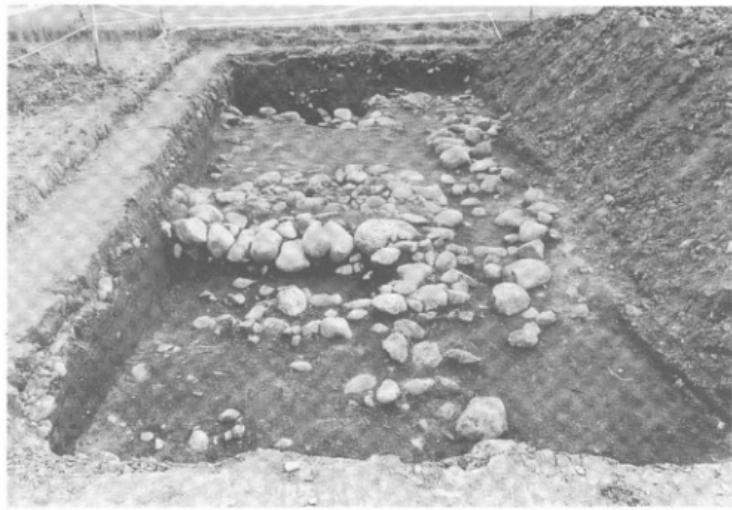
註

1. 高知県教育委員会編『高知県中世城跡分布調査報告書』高知県教育委員会 1984
2. 『長宗我部地検帳』香美郡下 高知県立図書館刊行 1962 P.321
3. 「南路志卷十三」「南路志」高知県文教教会 1959
4. 松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究』吉川弘文館 1971
5. 前田和男（山田の山城と土居）「古代・中世編」『土佐山田町史』土佐山田町 1979
6. 前掲註1・5による
7. 寺石正路『土佐名家系譜』歴史図書社 1980
8. 註5による
9. 註1・5
10. 小林健太郎『戦国城下町の研究』大明堂 1985

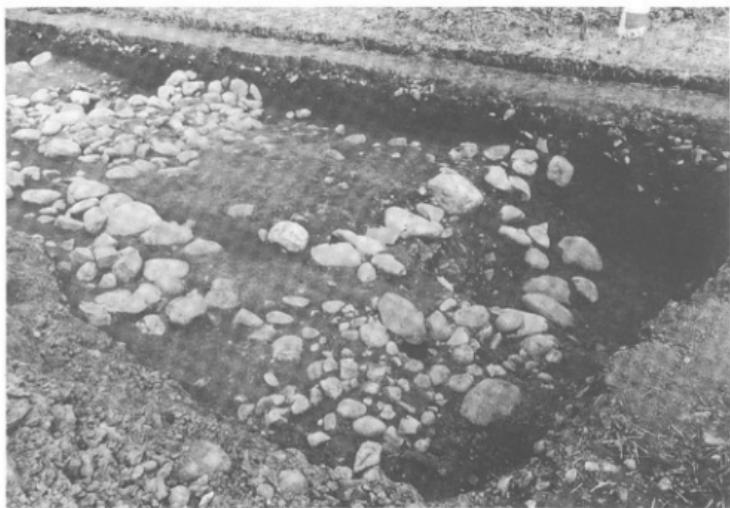
写 真 図 版



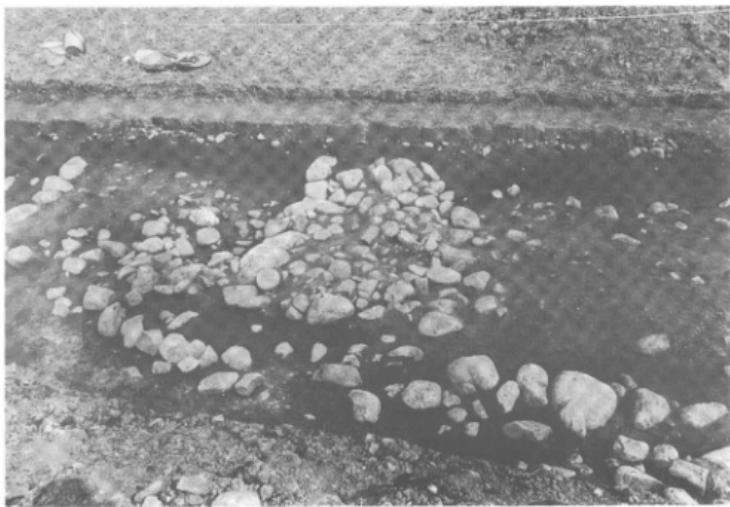
TR 1 (南から)



TR 1 (北から)



TR 1 (西から) 右上方 外堀



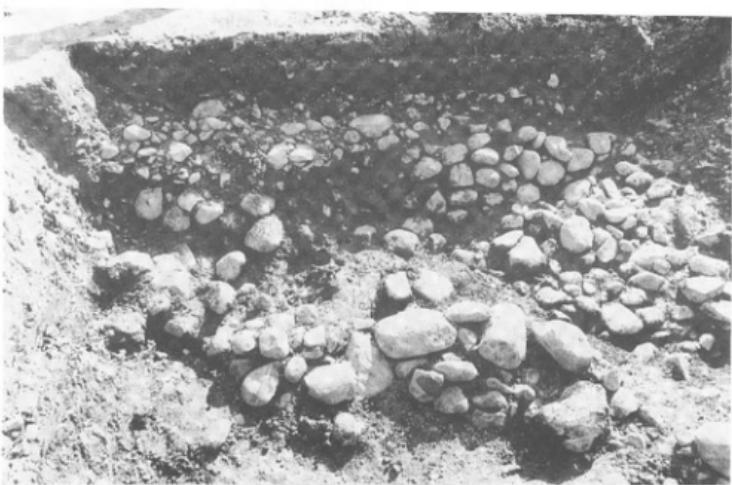
TR 1 中央部 (西から)



TR 2 調査風景（東から）



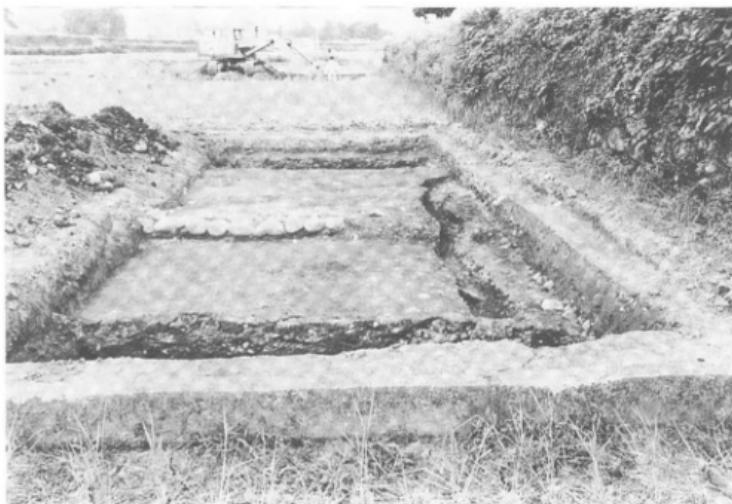
TR 2 内堀検出状態（東から）



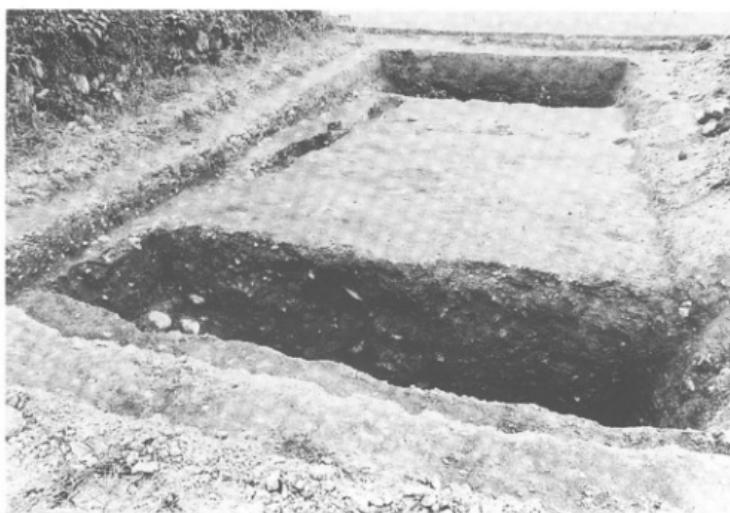
TR 2 内 堀 (北から)



同 上



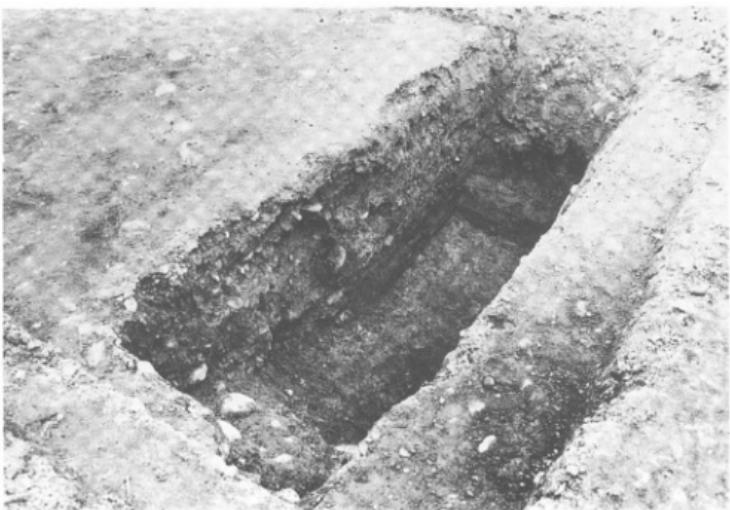
TR 3 (南から)



TR 3 (北から)



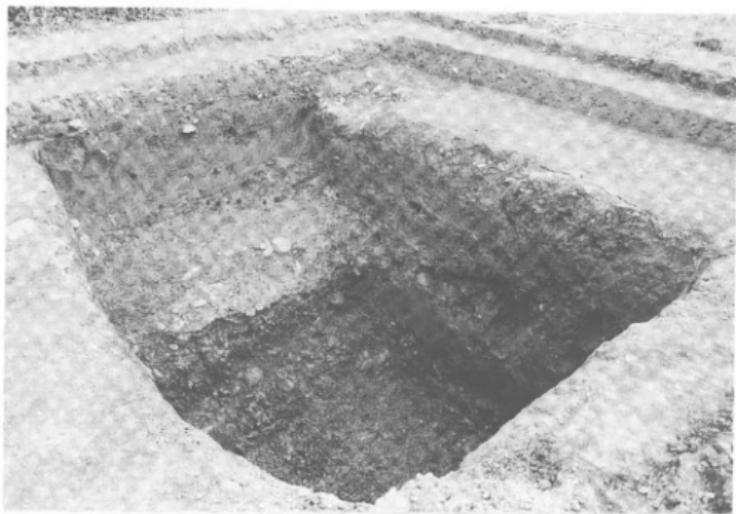
TR 3・南（南東から）



TR 3・北（東から）



TR 4 (南から)



TR 4・南 (西から)



TR 5 (北東から)



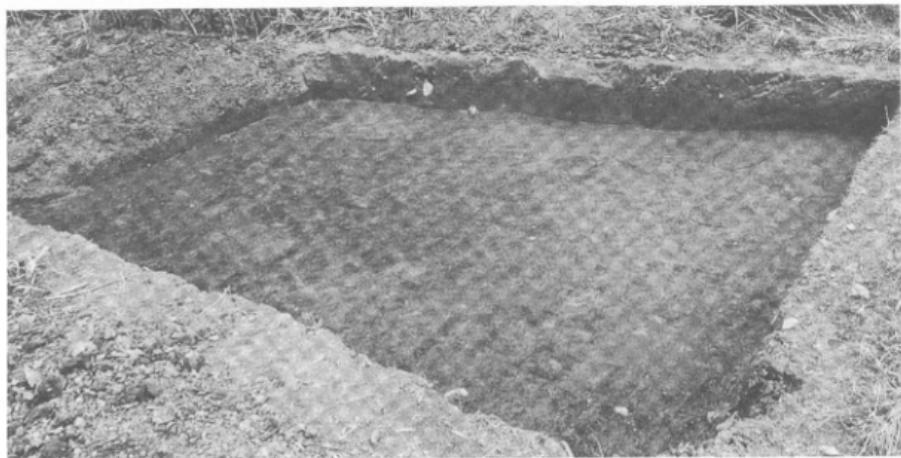
TR 6 (北から)



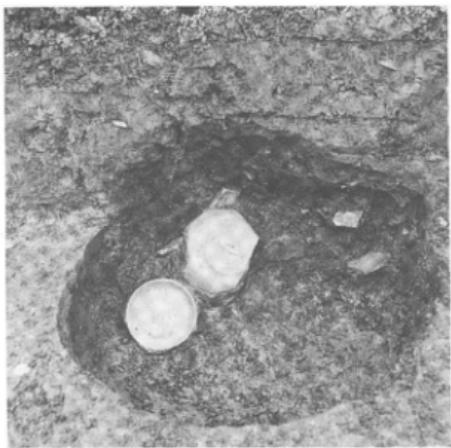
TR 7 (西から)



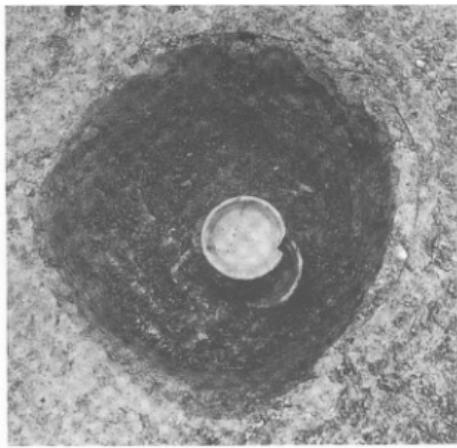
TR 8 (西から)



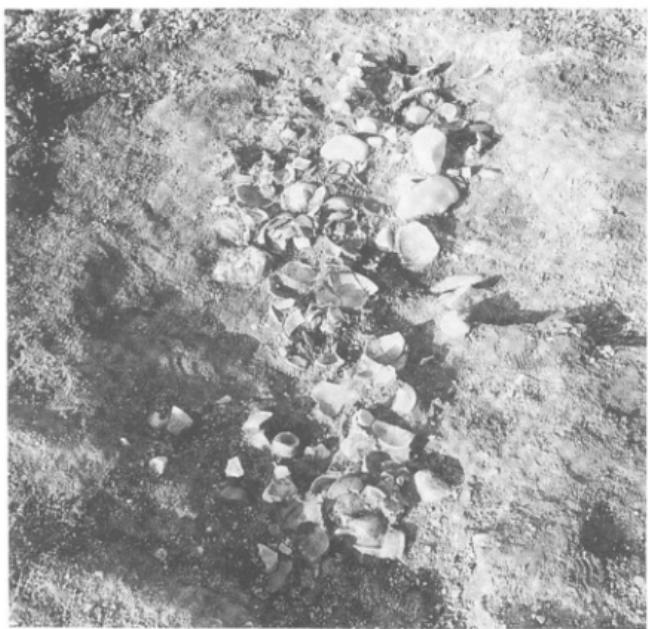
TR 9 + 10 (西から)



P 1 (南から)



P 16 (西から)



SKI (東から)



SKI (北から)



TR11 (東から)



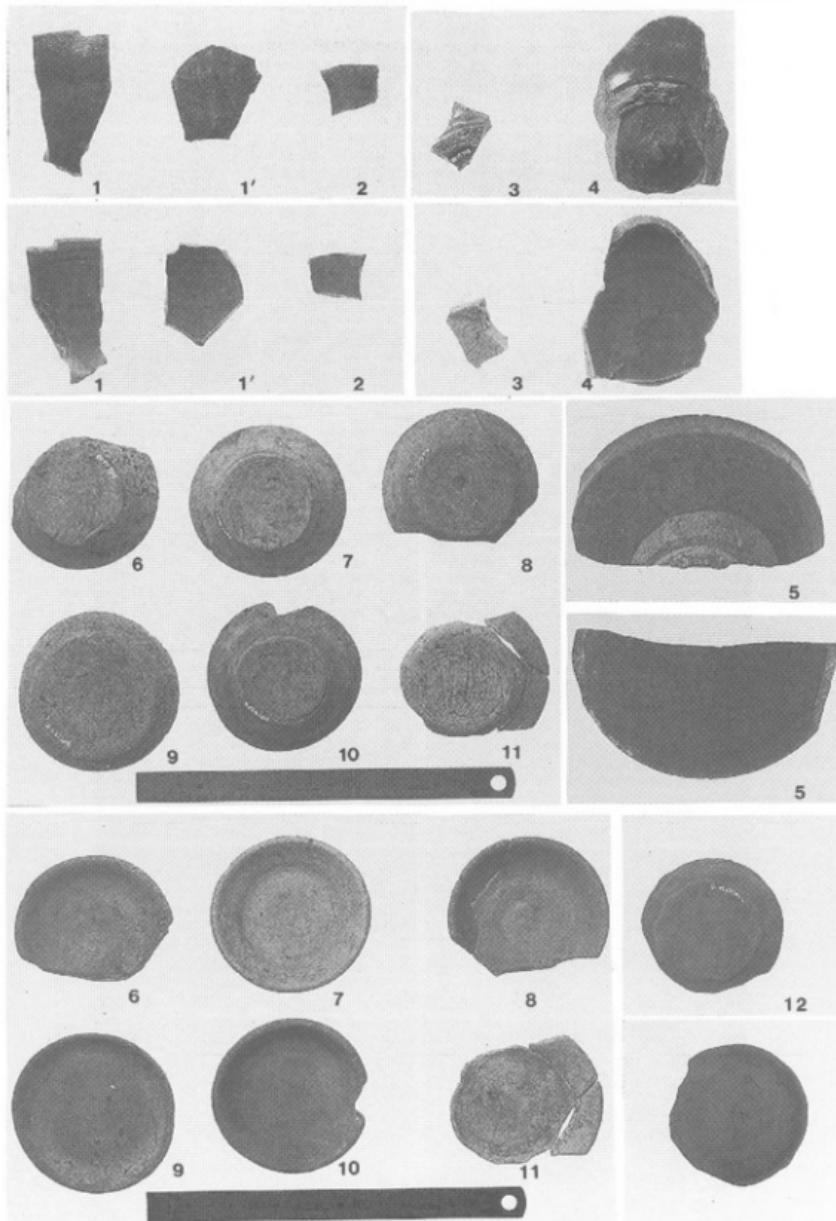
TR12 (北から)



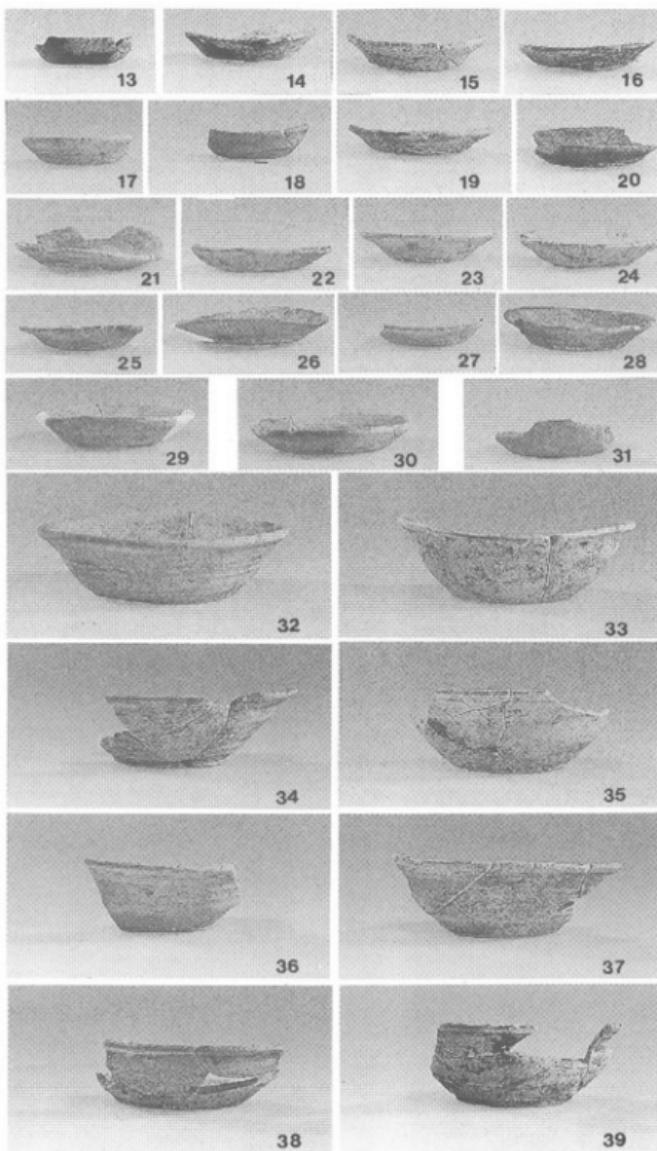
TR13 (西から)



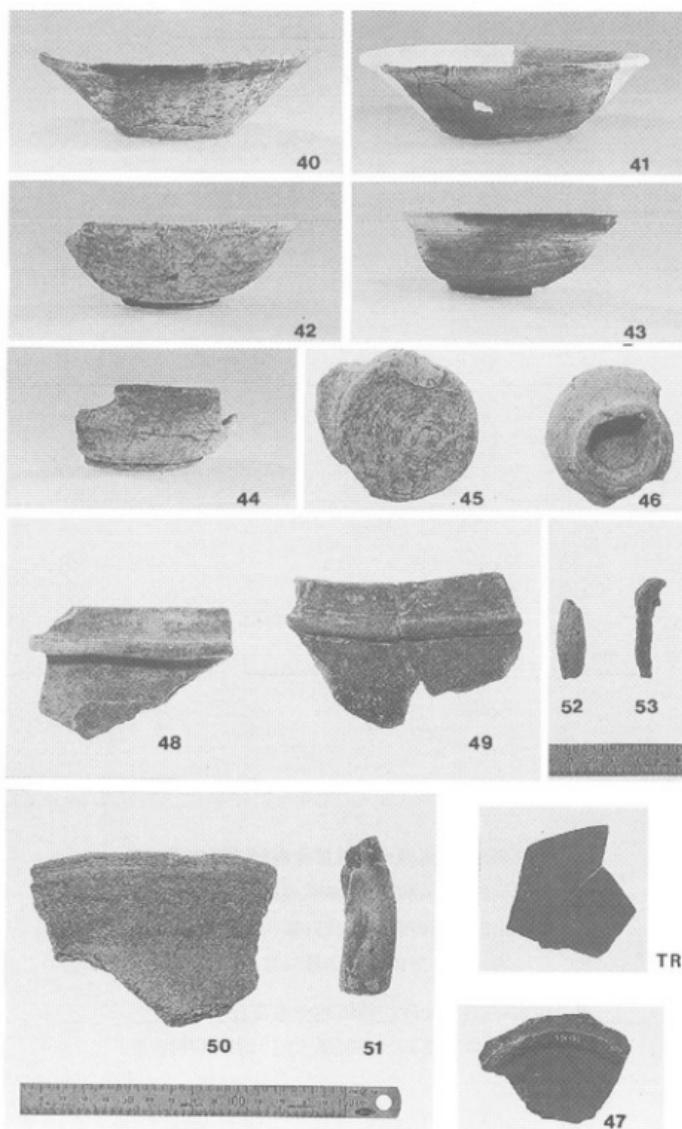
TR14 (北から)



出土遺物（青磁・天目茶碗・土師質土器）



出土遺物（土師質土器）



出土遺物（土師質土器・瓦質土器・須恵器・土師器・土錘・鉄製品）

高柳遺跡・高柳土居城跡発掘調査報告書
—明治地区圃場整備工事関連遺跡発掘調査—
土佐山田町埋蔵文化財報告書第11集
平成4年3月31日

編集・発行 土佐山田町教育委員会
高知県香美郡土佐山田町宝町1-2-1